

国際業務の 窓辺から

CLAIR 経験者からの
メッセージ

かけがえのない 「外国人としての2年間」



熊本市政策局総合政策部国際課 主任主事 谷崎 謙一郎

身についた「アドリブ力」

私がクレアパリ事務所に勤務したのは、2014年から2016年まで。上司にも同僚にも恵まれ、素晴らしい雰囲気のある事務所で、密度の濃い、しかし振り返ればあっという間の2年間を過ごしました。

職員として成長する契機となったように思うのは、海外事務所の主要業務のひとつである自治体の海外活動支援です。長期の出張に赴く機会も多く、アルプスの山小屋からシャンパーニュのぶどう農家、南仏の港町まで、多種多様な地域を訪れるチャンスに恵まれました。

長期の出張となれば、予期せぬ出来事やトラブルが必ず起こります。突然通訳を頼まれたりするのは序の口で、乗ったタクシーの運転手が歩行者と喧嘩を始めて車を降りてしまったり、ときには空港のストで飛行機が飛ばず、パリから鉄道でアルプス山脈を抜け、スイス経由でイタリアのミラノまで行ったこともありました。

こうした日本ではまず起こりえない予想外の出来事に対応するなかで、現場で臨機応変に対応するアドリブ力、そして「できることを、できるだけ」というある種の達観と度胸が身についたように感じています。

災害のなかの外国人

パリで過ごした2年間で最も衝撃を受けた出来事といえば、2015年11月に起きたテロ事件でした。帰宅して何気なくつけたTVに映っていたのは、銃撃現場の映像。やがて外からけたたましいサイレンの音が聞こえ、明け方までやむことはありませんでした。

この事件以来、私の生活は一変しました。やっと慣れてきたパリの風景が恐ろしいもののように見え、母国語でテロの情報を得られない状況に、心細さを感じました。

しかし、この経験が、帰国後すぐに役に立ちました。今年4月に起きた熊本地震では、熊本で暮らす多くの外国人も被災者となり、避難所となった熊本市国際交流会館では、連日多くの方が夜を明かしました。スタッフの一員として対応した私は、つたない英語でなんとか被災者の不安を聞こうと心がけました。

言葉の通じない外国で、あれほど大きな揺れに襲われた彼らがどれだけ心細かったか、テロ後のパリを生きた経験がなければ、もしかすると他人事のように感じていたかもしれません。私にとっては、言葉も習慣も違う異文化の中で「外国人として生きる」という経験こそが、CLAIRでの海外勤務を通して得られた最大の財産であったように思います。



パリ市内での観光物産展で日本の自治体をPR(2015年6月)

プロフィール

CLAIRでの経歴：

2013年4月～2014年3月：東京本部総務部企画調査課 主査

2014年4月～2016年3月：パリ事務所 所長補佐